HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域環境の変化と共に移り変わった景観
Author(s)	長野, 環
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観 : 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 20-21
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92917
Type	other
File Information	ronshu_biratori (12).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域環境の変化と共に移り変わった景観

長野環
平取アイヌ文化保存会 会長

私が生まれ育った地域、平取街二風谷は、民芸品店が数多くある集落でした。

国道２３７号線が整備されたのは、正確ではありませんが、小学校１年生前後のことでした。その当時は、今のように直線道路ではなく、マンロー坂と呼ばれる曲がりくねった旧道が通学路でした。その当時、気にすることもなかったそんな風景が、今となっては、とても素晴らしい風景だったことに気が付きます。現在は、環境整備という名のもと、イロイロなものが簡単に排除されています。ある人の言葉が印象的で､今も記憶に残っているのが､改変される場所の表土を、工事後に戻せば元のような植生になる｡・・・本当ですか？

両親が、アットゥシ織（正確には、当時はシナ織）で生計を立てていた時期があり、子供のころは、良く糸伸ばしをさせられたことを思い出すことがあります。

祖母も、アットゥシ織やトマ（ござ）編みをしていたのですが、ガマが、トマの材料だと分かったのは、大人になってからでした。祖母が使っていたイテセニ（編み機）に使われていた錘は、石ではなく、乾電池でした。それは、当時ハイカラで便利だったのではないかといまさらながら感じています。それがふだんの暮らしの当たり前の風景だったのです。

家の近くの沼にシキナ（ガマ）が生えているのは珍しくなく、沼に関しても、一つや二つではなかったと記憶しています。

親戚の家の沼も、大きかったと思っていましたが、今見るとそれほどの大きさではないこと、利用されなくなった沼は、ガマすら生えない環境になっていました。現在二風谷ダムの事務所（鵡川沙流川河川事務所）がある場所も､昔は田んぼで､その一部で冬の時期､スケートリンクが作られていて、スケートを滑った記憶があります。対岸、沙流川右岸の、熊の姿岩としてご存じの方も多いペウレプオッカの岩から、下の沼に飛び込んで遊んだという話も聞くと、昔の子供の遊びは、今の私たちの世代では想像もつかないほどワイルド感半端ない事がわかります｡多分､ケガをしない加減が自然と身につく環境だったのだと思います。

子供の頃、川遊びというと、堰堤（二風谷頭首工)、堰堤ではヤツメウナギ捕りを見た事、通学路の途中に流れている沢にドジョウ獲りに行き食べた事もあります。

仕事柄（アイヌ文化保全対策室勤務)、工事による影響を受ける木本･草本類の調査を行っていて、気になることは、チセの屋根や壁材として利用するスプキ（ヨシ)、敷物の素材となるシキナ（ガマ）の自生している箇所が少なくなっているという事です。それらの素材を、工事の際に、水生植物の再生に向け、植生にあった環境を作ってもらえれば増やすことが出来るのではないかと思っていると、それは（思ったところに思ったような植生を作れると思うのは)、人間のエゴというものだという専門家の意見を耳にした。・・・本当ですか？

トマトハウスが並ぶ風景を、今現在の文化的景観と呼ぶのかもしれないが、伝統文化の伝承活動をしている側から言わせてもらえば、それらの素材が育つ環境を再生してこそ、アイヌの文化的景観と言いたいです。ただ、個人の力では、かなうはずもない戯言でしかないように感じられる現実。それならと思って、仕事として携わっている環境下でも、壁に

ぶち当たっている状況です。大きな政治の力なくして、景観の保全・再生も成り立たないのが現状なのだと思い知らされています。

平取地域に関しての文化的景観は、アイヌ文化だけではないが、しかしそれは無くてはならない景観要素の一つとして重視し、特化した整備を進めてもらいたいです。

写真１　1970 年代の我が家のアットゥシ織（シナ織）作業風景

写真２・３　シキナ（ガマ）が「二風谷コタン」の水辺に育っている様子